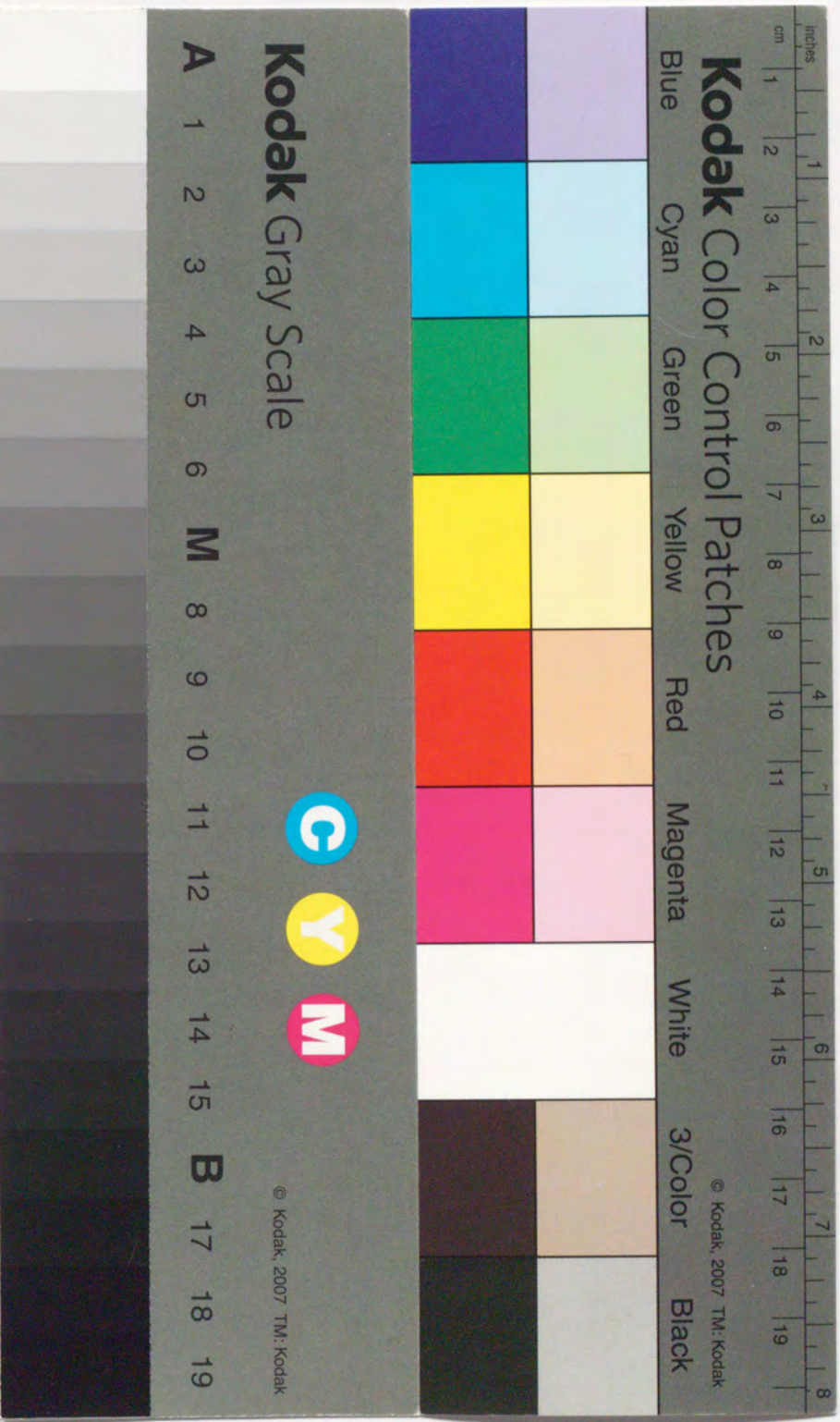
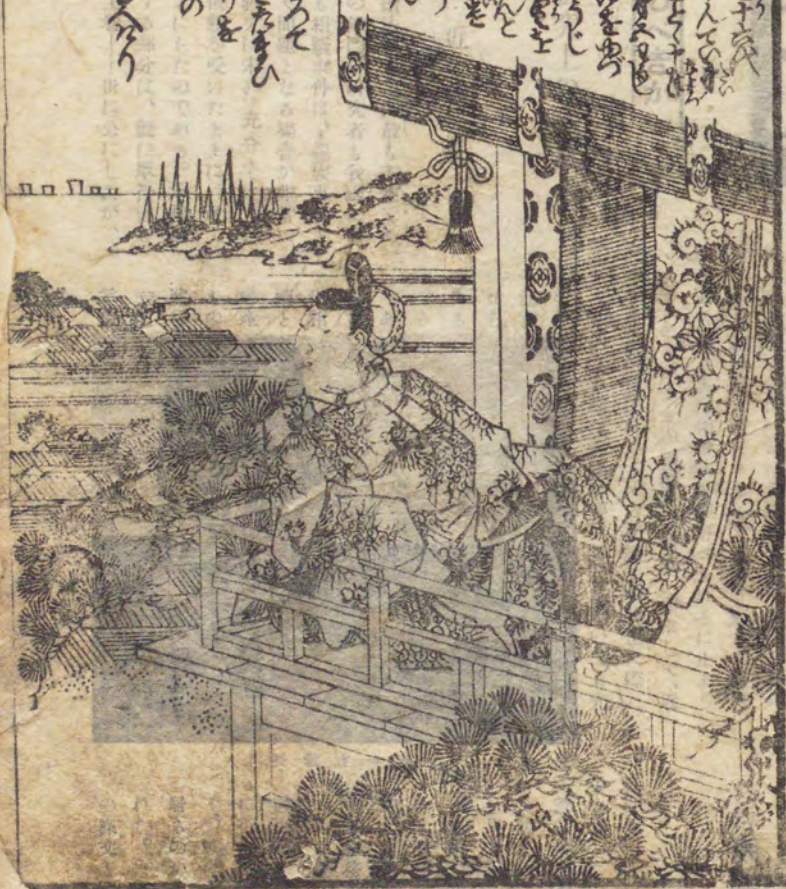




人重千石

[illegible]

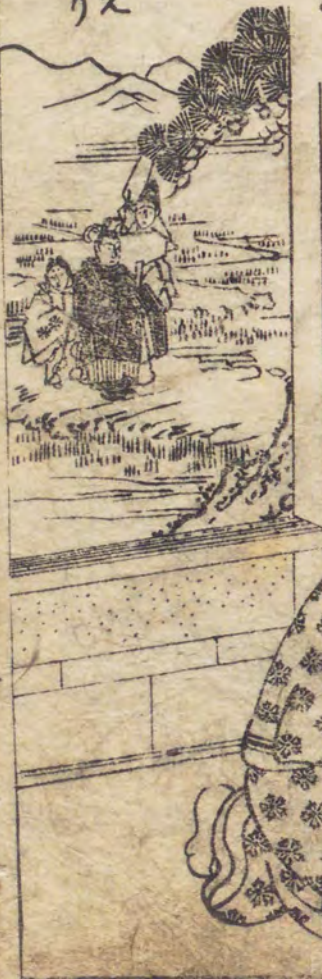
ちのつこの國
 なるはさうな樹
 まく父をいせまうあつ
 てくるやうなるおふは
 とあるなりとてそのこ
 んをありきとてか
 ひくみず自でく山をた
 うりこれを一ちていとま
 くおま事あつて又か
 あつたれをさうとり
 のしむるわあひそめし
 ぬて人るがう傍をれに
 さうり一れまじあまれ
 あつたとて人なるうそ
 なげんとおのりせん
 くらふといふ一ぢ

やうびをうけり
なる



矢田部黒磨 武義のふみり
ありやふれあありしときとの
ううたひあうしがむあしく
ありけれうさぶがさうそま
えええすうねんのあひで
あうさりのをちゆくしあう
どんけんごてこのり
ふつをとさのふ光仁
天宮のふみりふみり

たし清人の
あまうらどふ
あしをたそ
ねんぶあま
やをあら
されあうら
のあまれ
天下ふ



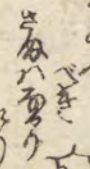
龍虎の人あていとけあきより
 きるまゆて又抄しうちあなり
 との母をやく世をまうられへ
 るつうやそなけあまけ
 暮さきうたつうそとけあはの
 正しうてふさやと感さの
 ちう人尊像あそめきさるの
 つまとあふ葉中せいのたあ
 あそあきうちあられふ
 さあといふ人あれども
 二まふはそそふ天鼓の
 帝きこゝやうてあ
 ころ二級をぬり
 ころぎのをぬり
 さそたふひ
 なる



東へんず大坂本
のひらうの城外の
をかりちんのきくの
うけ強を將と人ド
たりとそをまふましき
所をささんぶよりみきを
おもうがなすきんすけ
はるくもうさぐりこれ
なりあんどをさとてけ
けあらりとたつめけ
むづからていひやうまれ
えしとをみなかんと
てあゆみのてつまつき
たれをし
あの人とおひ
まかせせしとぞ
いひたる実なる
まどれさうろう
あ人のいのち



ちやうど有り父をうつらう君を
あひけうちあひけうちをうらうめ
よちうちいすのちをあひのちのりし
あちうちいすのち



農民甚助

較つて

[illegible]

漢文帝

漢文帝の御世は、天下を治め、民を安んずるに努められた。文帝は、仁政を行ひ、百姓の苦しみを憐れみ、刑罰を軽くし、賦税を減らした。文帝は、儒教を尊び、賢人を重用し、国家を治められた。文帝の御世は、漢の黄金時代と呼ばれ、天下は太平な世となった。



関子騫

関子騫は、父を失ひ、母を失ひ、孤児として育つた。彼は、孝行を尽し、母を養ひ、父を慕つた。関子騫は、孝行の徳を以て、世に名を馳せ、人々に慕はれた。関子騫の孝行は、後世の戒と爲り、人々に教訓と爲られた。



風霜

詩曰
関氏有賢良何曾照曉
夜更前留每在三子免
風霜

あうあういふ
あうのあう

[illegible]

ざるやどふとていかにあを
 せふのやどふとていかにあを

おそれまゝに御のしむよりなると
思われざるやうにとあるやうであらう
まいををしとあり

戲舞學嬌痴春風動

彩衣双親開
笑喜色滿庭

姜詩

言ふべし入世の心
 ある人皆つゝおぼへ
 るものごとく思ひま
 ず、實のなきをわ
 かりすぢちち知れ
 つてをいしてこそ
 眞のなきを
 度してこふは、あをを直しめ
 うきのなきすをよとせぬ
 てあらう病とあらひや
 つたりあるときさやじが
 からうか如くはのどとて
 あなさとたあらでさ
 中ねありこれを



舍側甘泉出
子能知事母

一朝双鯉魚
婦更孝於姑

知事母

揚香

ひとり父をのりある
父のふしは人知れず
あはれあはれと涙を
さす静夜の空をうめ
正をたれとてを遠ざ
らんてはつらきもの
あはれあはれと涙を
さす静夜の空をうめ
あはれあはれと涙を
さす静夜の空をうめ
あはれあはれと涙を
さす静夜の空をうめ

深山逢



白額努力博
理風父子俱
無恙脱離縁
口中

甘黄香

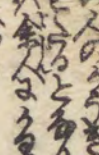
あはれあはれと涙を
さす静夜の空をうめ
あはれあはれと涙を
さす静夜の空をうめ
あはれあはれと涙を
さす静夜の空をうめ
あはれあはれと涙を
さす静夜の空をうめ

詩冬月温食暖夏天扇枕涼
日兒童知子職一千古一黄香



えんそくをうけつゝの世の猶人あり
今更なりて待たぬをよしと

是より人有りぬきうつひんもおちしき
 うきもありとゆどもううう井のふかふか
 うつふきのをとりあつうひせばれうとま
 るあつこれをおらひておはあえあえ
 うつうきをおとるをせしされば
 りて万をうるあれぞものちの
 かりくおちさつわれたるこそ
 ちの人をうきでんかあう
 うきうとありあひあ
 る人ふうありてあめたる
 きんあり



詩曰
見
見
見
見
見

貴顯聞天下

平生孝事親

汲水消弱器

婢妾豈無人



ちうもつ
れ子のす

[illegible]

詩

負^レ米供^ニ甘旨

曰
猶意おもひまう二旧こ効かうを勞



多し、其のたれめちを
すんをまひやぶ、さうある

[illegible]

うりやうにあらはれし事をもてすむるもの
 とてふべきがその人になりそとを言へ
 これこそこのあまのめづるな人とよめる
 あまの姫のゆきをばやくちかひはく
 まさのこころごとけりとほひなれぬ人
 その心をよみありのまゝなることされ
 るうの志一たきやふかきまをかね
 ふりたりとふかき藤のちなりとこれ
 がてとぞふかきやあれともいひ入
 たるなりとふかきやあれと

老親思鹿乳身截

詩
うぐのきをりかたうせ
馬山文吉二高

日

詩山中帶簫

輯者

山々亭有人

肖像

一孟齋芳虎

赤城義士銘々實錄

山亭有人錄
一孟齊芳虎

初編上
卷一

このやうに
この内、日紀と云ふゆゑに、泉岳寺修善の軍書に化法とを求め
て、又と抄録せしむる中、の實録あり

誠忠 義士 烈女 銘々傳

二編近刻

多岐葉文獨警古

江澤用文

遠く一筆啓上のふけとて
外め文申忍利の文申
婦初のふめは分るる
文事ふいととるさん
を重宝のさるり

葛師為秋画

必書此繪を冠附

初海出朱二編近刻

森屋万象といふは
おろしたとて代々
おろくいのとの絵
おろくといふと
おろくといふと
おろくといふと

東都

書物

問屋

大島	山口	森屋	丁子	播磨	和田	岡山	山城	小森	山崎	須原
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
傳右衛門	藤兵衛	治兵衛	平兵衛	勝五郎	市兵衛	嘉七	政吉	新兵衛	佐兵衛	茂兵衛

